

故竹林庄太郎大学名誉教授を偲ぶ

今 井 俊 一

(大学商学部教授)

竹林庄太郎先生は昨年七月十三日、大阪市住吉区内の阪和病院で肺炎のために逝去された。享年八五歳。私は入院中でお見舞にも行けなかった。

同志社商学（古稀記念号）に「先生のプロフィール」と題して小文を載せてからかれ十五年の時が流れている。その間、何時でもお会いできると思いつながら行けなかった。

「偲ぶ文」を依頼されたのも何かの廻り合せであろうと思ひ、御冥福を祈りながら想い出を綴る。亡くなられた年には東ドイツにつづいてソ連という「超大国」が消える世界的な大変動が生じた。先生はどのような感慨を抱かれたであろうか。

享年年間、南海の雄、薩摩藩の大坂藩邸に出入りし、進取・豪気を謳われた回船問屋店主竹林政拳を祖父として明治三十九年に大阪の堺筋清水町に生を享けられた。少年の頃から豪氣と英才で知られ、大阪高商時代には祖父伝来の性格を発揮された。陸上部、相撲部などの友人と交わり、文化面では同人雑誌「商海」の編集・公刊、烏ヶ辻の学生食堂賄征伐などによく現れている。

将来を嘱目され、大阪商大経済研究所員に

就任。爾来、終戦の翌年まで十七年間多くの先輩、同僚に恵まれ、或いは酒盃を傾け、研究に情熱を燃やされた。当時の特筆すべき仕事として経済研究所の編集による「経済学辞典」、「世界経済年表」、「経済学文献大鑑」、「経済資料文献大鑑」、「大阪商業資料集成」、「調査彙報」、「経済時報」、「経済学雑誌」および「大阪商科大学経済研究所年報」などの編集・執筆の一員として活躍、そこで学問の基礎を固められた。処女作「日本中小商業の構造」（有斐閣、一九四一年）は日本出版文化協会推薦図書となり広く知られるようになった。

戦後混乱のなか先生は研究所を辞され、しばらく日本企業経営研究所理事長に就かれた。その頃、関経連調査部にいた私は調査部長の森下二次也（商大先輩）と一緒におめにかかったことがあるがはつきりした記憶はない。私が同志社に入ったのが昭和二十三年。その翌年経専を母体に商学部が設立されたのを機会に、住いも京都に移した頃、先生は中小企業論および商業経営論担当教授として商学部の陣容に加わって以来は先輩として交宜を重ねることになった。すでに木村喜一郎（会計学）、四宮恭二（農業経営論）、根前重男

●竹林庄太郎氏略歴●

- 1906年5月 大阪市南区清水町で誕生
 1915年3月 大阪商科大学高等商業部卒業
 1915年4月～1946年9月
 大阪商科大学経済研究員
 1947年7月～1951年9月
 日本企業経営研究所理事長
 1951年10月 同志社大学商学部専任講師
 1953年4月～1959年3月
 同志社大学研究所資料室主幹（1957年4月、人文科学研究所資料部に改称）
 1953年10月 同志社大学商学部教授
 1956年4月 同志社大学院商学研究科（修士課程）教授
 1965年4月 同志社大学院商学研究科（博士課程）教授
 1968年4月～1968年10月
 同志社大学商学部長及び大学院商学研究科長
 1977年3月 定年退職
 1977年4月 同志社大学名誉教授の称号を受く
 1991年7月13日13時47分永眠 85歳



（原価計算連）があり、商大関係が顔を揃えたのであったが、今や全員が物故された。感無量である。

ともかく先生とは商学部の初期から三十年近くを人生の良き先輩として絶妙な指南を受けた。教授会の仲間としては同志社の発展を願って議論を交わした熱い年月であった。たまには先生の御友人と共に盃を交わす京の夜など、いろいろなことが走馬燈のように浮んでは消える。そのなかで特筆すべきことは、新設間もない商学部を知って貰うための講演旅行を企画し参加したことである。なかでも北陸の福井・金沢・新潟では地方新聞社・NHK支局などの後援を得て盛大で楽しかった。それも先生の友人の力に負うところ大であった。

また永年の経済研究所で培った経験を活かし同志社大学研究所資料室主幹として腕を揮われた。資料の蒐集・整理・閲覧の体系をつくりあげ、昭和三十二年には人文科学研究所に改組、今日の人文科学研究所の発展の基礎固めをされた。同研究所紀要第一号には『下請け企業の組織化について』を書いておられる。また「橋大・大阪市大・神戸大などより

なる経済資料協議会の幹事校として協議会編『経済学文献季報』の刊行にも大きく貢献された。その後、いわゆる「大学管理法」をめぐる全国的な大学紛争期の商学部長としての御苦勞や、手広い業界診断活動と研究活動を結びつけて御活躍されたことなど思い出は数々あるけれども割愛し、ここでは戦後まもない同志社の再出発の時期に止どめた。

先生は同志社停年退職後も京阪神を中心に多くの有能な中小企業診断士を指導・育成された。最近は大阪梅田地区の再開発マスタープランの最高責任者として、大阪市大の磯村教授を始めとするスタッフの助言に当たられたようである。

先生は晩年になっても学問・思想の思索活動は盛んで、科学の根源を洋の東西に求めておられたようである。まさに世界激動のさ中にこそお話しをしたかった思いで一杯である。

福原春代先生を偲んで

—豊かな天分と柔和な笑顔と—

坂本清音

(女子大学教授)

私たちの敬愛する福原春代先生は一九九一年七月二五日、九二歳のご生涯を安らかに去られました。それから五十日後、先生を偲ぶために集まった教え子中心の追悼会で、みんなに共通して残っていた先生のお姿は、りんごのような頬、慈母のような微笑み、決して感情を露にされることなく抑制された静かなお話し振り、いつも目を見て話されたこと、一人一人の中に潜んでいる才能を逸早く見つけ、それを伸ばすよう折に触れ励まして下さったこと、決して上から押さえつけるようなことはなさらなかったこと等々、そのどれもが先生との人格的交わりを通して始めて感じることの出来る思い出ばかりでした。もちろん、ヘレン・ケラーやトインビー博士来日の折の名通訳としての先生の晴れ姿や、黙々と三十年間も続けられていたボランティアのご奉仕等、少し離れた位置で目にした先生のお姿についても語られました。それらを通してても伝わって来るものは、単に技術的・専門的に熟練された先生の優秀さというよりは、先生ご自身の豊かな感受性と深い理解力のフィルターを通すことにより、いつも言葉が魂から魂へのメッセージへと変えられることへ

の驚きでありました。このことは、日本中の大学に先駆けて女子大学に設置されたと言われる、「人間関係学」の担当者として、先生が最適任者であった事と関連していると言えましょう。敗戦直後の日本の復興期に、先生がキリスト教信仰に基づく人格主義をバックボーンとした新しい女性の生き方を身をもって示して下さったこと、および、新制大学として発足した女子大学のユニークなカリキュラムを推進するために、初代学長ヒバード先生の右腕となつて働かれたことについては、女子大学の歴史が編まれる時には、是非とも整理し記録しておくべき先生の大切な足跡でありましょう。

が今は、そのような先生を育て上げた要因は何であつたかについて、紙数の許す限り書き留めておきたいと思えます。

先生の父上が湯浅吉郎氏（治郎氏末弟）であつたことは、比較的よく知られております。湯浅家の人たちは、新島先生が帰朝後すぐにご郷里安中で伝道を開始された時以来の熱心な信徒でありました。教育は是非とも同志社でと、吉郎氏は明治十年、二〇歳の折に故郷を出て英学校に入学されました。後に同志社



●福原春代氏略歴●

1899年4月 京都市で誕生
1917年3月 同志社女学校普通部卒業
1920年3月 同志社女学校専門部英文科卒業
1921年5月 福原勤之氏と結婚
1940年6月 米国スキャリット・カレッジ終了 B. A. および M. A. の学位を受く
1940年9月 神戸私立パルモア女子英学院勤務
1945年4月 同志社女子専門学校教授兼寮務主事
1949年4月 同志社女子大学助教授兼女子専門学校教授
1962年4月 同志社女子大学教授
1964年4月 定年退職
1964年5月～1975年3月 同志社女子大学嘱託講師
1991年7月25日 5時30分永眠 92歳

神学校教授・京都府立図書館長として活躍されましたが、豊富な趣味を嗜まれつつ、実に洒脱で自由闊達なご生涯を送られた方でした。

一方、母辰姉は代々三田藩主のご典医を勤められた家系のお出で、父上も兄上（川本恂蔵氏は同志社病院院長）も医師であり、母上を長姉とするご姉妹は三人共、神戸女学院創設期の卒業生でありました。しかも、三人共、同志社出身の前途有望な青年と結婚され（二女夏姉は三宅荒毅氏と、三女咲姉は原田助氏と）、夫たちが近代日本のオピニオン・リーダーとして、特にキリスト教界において第一級の働きをされている折に、妻たちも単に家庭婦人として家を守るだけでなく、社会と関わりつつ女権の拡張のために優れた働きをなさいました。先生の母上は神戸英和女学校高等科の第一回の卒業生、明治二八年から三十年の間、神戸女学院同窓会長、そして、神戸女学院最初の理事会（明治四〇年）の日本人理事のお一人でありました。このようにご立派なご両親の下で、キリスト教の愛に根ざした家庭教育を受けられたことが、先生の円満なご人格と優秀な頭脳に大きく影響したことは

間違いないと思われませんが、先生は最晩年になられ、こちらから根掘り葉掘り聞かない限り、決してこのようなお話は聞かせて下さいませんでした。

それ所か、先生は学歴や社会的地位を取り去った裸の人間の価値の尊さを繰返し教えて下さり、また、徹底した弱者への労りを身をもって示して下さいました。この背後に私は、先生のもう一つのご生涯を思い起さずにはいられません。それは、先生がご結婚三年後に夫君（福原勤之氏大正九年大学英文科卒、同志社中学教諭）を亡くされたことです。それから十三年間、先生はすでに身につけていられた英語力を生かして宣教師の秘書となられ、京都・東京・広島と居を移しつつ、遺子愛和さんを養育されました。そして、三八歳で奨学金を得てスキャリット・カレッジに留学され、三年間で、宗教教育学の B.D. と M.A. を取得されました。それらのご苦労が全て益となつて、帰国後の先生のご活躍の中に見事に開花したことは言うまでもありません。

先生のご生涯を語るには、一冊の書物の分量が必要です。今はただ先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。